COLUMN

循環型社会の形成 ～収集運搬の現場から～

白井グループ株式会社　代表取締役

白井 徹 TORU SHIRAI

1965 年　東京都足立区生まれ
1987 年　国士館大学経済学部を卒業し、同年よりハナエ・モリ・インターナショナルに勤務
1990 年　白井運輸㈱入社
2003 年　白井グループ㈱設立と同時に代表取締役社長に就任
2015 年より白井エコセンター㈱社長を兼任

サーキュラーエコノミーへの挑戦 収集運搬の現場で起きている事

東京 23 区で約 90 年、時代ごとの廃棄物に関する問題に、グループ内の白井運輸が一般家庭、白井エコセンターが事業系廃棄物の収集運搬業者として対応して参りました。白井グループは主にこの二社のデジタルトランスフォーメーションを推進している会社です。

建設廃棄物や工場系廃棄物に関してはそれほどの経験がありませんので、本稿の内容は、あくまで都市で発生する廃棄物の資源循環に対し、現場の事しか分からない私達が感じ考えている事です。

収集運搬業者の仕事は、不要なモノを排出者から預かり、指定された目的地に運ぶことです。搬入先への処理費や再生費用も排出事業者に代わり立て替えます。処分や再資源化に関する最新技術は持っておりませんが、排出事業者と直接関わる業務のため、お客様から与えられる課題に長く奮闘して参りました。例えば最終処分場の逼迫、ダイオキシン問題、トレーサビリティ確保、各種リサイクル法への対応、プラスチック問題、etc.
これらの社会課題解決への初めの一歩は、新たな搬入先の確保とそこまでの新たな分別収集ルートを創る事です。それは、トラックドライバーと安定した積荷の確保に向けた闘いでもあります。特に、家庭ごみを地域単位のルールで扱う白井運輸と比べ、事業ごみを扱う白井エコセンターは排出事業者責任の下顧客ごとのルール、条件に合わせ何百もの収集ルートを創る必要があり、効率的な人員・機材配置がとても難しいのです。

従来の排出事業者、関係者からの要望は『分ければ資源、地球のために 3R』でした。そして現在は『サーキュラーエコノミー、循環型社会の形成』に変わった。何が違うのでしょうか？

分ければ資源・3R の時代は、コスト優先であった気がしています。排出事業者からの要望は「3R は進めたいが高くなるなら今まで通り、または安く出来る他社を探す」というもので、結局は廃棄物処理予算内での努力に過ぎませんでした。

それが現在は、排出事業者と同一法人でも、資源化のご依頼元が廃棄物管理部門から、調達や販売、マーケティング部門に変わってきています。要するに、廃棄物の処理費と製造資源の調達費、商品の販売価格も含むサプライチェーン全体を見て、彼等は「資源化できるならコスト増も考えなくはない。どこまでやれるか？」と本気で迫って来ているのです。大きな変化です。我々と様々な企業との調整が既に始まっています。

これはチャンスとも捉えられます。なぜなら片付けるだけのサービス業から資源の供給を担うビジネスへの変換が可能となるため、処理費の適正化・増加コスト分の価格転嫁が進む可能性があるためです。

一方で大幅なコスト増と人手不足を避けるために業態の変革を関係者と行わねばならず、労力は倍以上になっています。お客様ごとの収支だけ見れば済むという話ではありません。製造業をはじめとする大企業群からの要望が今迄とは違うのです。

次回からは、資源循環を阻む様々な問題と、その解決策として廃棄物処理の DX についてお話したいと思います。